水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十一月

1	高原	うそ寒や試しに食ぶる非常食 こころあたたまる句です。	檜鼻ことは
2	音思	母の待つ鯛焼き二つ前かごに 老いてますます盛んな作者が羨ましい。冬ばらの謙虚さを見事に表現。	新井のり子
3	修 のり子	衰へぬ気力体力木の葉髪	西村青夏
4	凡士	フランスパン妻に供えて秋深し 長いパンをどのように供えたのか？意外性がある。	森佳月
5		命懸けクチクラを脱ぐせいこ蟹	網野月を
6		よく切れる包丁の音秋茄子	ありぎりす
7	ことは 光雲2 京子	純情は父の遺伝子冬薔薇 今の世に「純情」という言葉に新しさを感じてしまう。冬薔薇の選択が良い。	荒一葉
8	たか子 允孝	歩幅にて衰え知るや秋の道 私も高齢者。全く同感です。若者にはどんどん抜かれるし、ちっとしたところでつまずく。夕暮れの真っ赤に染まった山肌は本当にきれいですね。老いは足元からやってくるとか。十分に気をつけて散歩で補ってください。	航
9		初時雨高野の清爽よみがへる	高原ひろし
10	稀香 小麦 音思 しんい マスミ 京子	白萩や記憶こぼるる妻とゐて 記憶を失っていく妻を白萩零ると美しくたとえて見事です。白萩・記憶がこぼれる妻・見つめる夫の三者の静かな寂しさが伝わる。奥様を気遣いながらの暮らしぶりが感じられました。季語に脱帽。何時かは、自分にも訪れる事かも。「記憶こぼるる」が切ない。中七「記憶こぼるる」が美しく哀しい。	後藤允孝
11	ひろし 霜里	冬枯やまたも時計塔にゴジラ 今度のゴジラは怖かった。	石関六弦
12		冬初め花茎の兆す胡蝶蘭	しーしー
13	爺月 佳月 航 六弦 幹子 風子	みちのくの梁の太さやきりたんぽ 東北の古民家で味わう郷土料理を楽しむ景が浮かぶ。梁の太さが具体的。梁の太さと季語の取り合わせがいい具合です。故郷の黒光りした太い梁の下で、いろりを囲み家族で食事をした景が浮かびます。きりたんぽの季語に幸せを感じます。梁の太さときりたんぽで舞台設定完了、後は読み手の想像に任せる句。	河野凡士
14	ひろし	越えられる筈の段差やちやんちやんこ	青木鶴城
15		カラフルな市民ランナー冬はじめ	本橋稀香

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十一月

16	のり子	高速使用は時間を買っていたのだと再認識。 高速や時間（とき）を買うとき木の実落つ	境界子
17	稀香 佳月	魚群探知機をつかっても不漁なのは気候変動の為なのか鰯雲が皮肉です。 映らない魚群探知機いわし雲	光雲2
18		妻もそうでした。 猫はしやぐこたつの準備待ちきれず	小林土璃
19	のり子	落日に真赭の芒彩濃ゆく	衛
20		靄薄れ苔桃紅をほんのりと	幸子
21		木枯しに堪へる銀杏の青葉かな	秋谷風舎
22	允孝 光雲2	夕暮れの真っ赤に染まった山肌は本当にきれいですね。 落日の朱の極みもて山装う	岡本たか子
23	一葉 みづる	温故知新、振り返りの夜長が生きてる証。日記の解読だから自身か身近な人のものであろうが、ゆっくりと文字を辿りながら懐かしい過去をかみしめているようだ。 古日記擦れ文字解く夜長かな	和田イチ子
24	凡士 マスミ	中七、下五で墓じまいの淋しさより明るさが感じられる。大きな仕事をなし終えて、ほっとした気持ちと寂寥感に包まれている作者。綺麗な桜紅葉に慰められてもいる。 墓じまひ桜落葉に日の匂ひ	しんい
25	高原 界子 きいち	”泳げたいやきくん”のように新たな恋に飛びだてそう。鯛焼きがだんだん冷めて来れば、手の温もりも同じ、でも未練があるのかな？ 鯛焼や終わりし恋に手の温み	新暦文
26	佳月 霜里	いくら掃いてもキリも無し。 落葉掃くまえに風来て掃きにけり	俳爺
27	航	続きをり　の表現が良い。 しぐるるや妻の沈黙続きをり	立野音思
28		枯笹の奥に紫式部かな	小林京子
29	土璃	ひとりの冬夕焼け」の措辞がよい。 稜線を行く久弥ひとりの冬夕焼	渋谷きいち
30	たか子 しんい	京都東福寺の回廊を歩く。今が盛り．紅葉が満ち満ちている。表現が素晴らしいと思う。今見頃なる京の紅葉。 廻廊に紅葉溢るる東福寺	龍野ひろし

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十一月

31	凡士	学食の今日のご馳走牡蠣フライ 広島の学校か？何か特別な日か？そこらが匂えばなおよい。	反町修
32	俳爺 ひろし 幹子	白菜剥く一枚毎の白さかな 白菜の白を活かした詠みである。まだ本格的な寒さではなく、気持ちの良い日に数人でのおしゃべり。笑い声や話し声が聞こえてきます。	霜里
33		ガザ匂ふ銀杏落葉に寝転べば	森下山菜
34		初鱈の広告届き出す土鍋	かげろう
35	ことは 寒立馬 航	そぞろ寒天井高き阿弥陀堂 張りつめたような静けさが伝わってきます。臨場感があり、想像して身震いを感じた。天井高きとそぞろ寒が具体的。	丸山マスミ
36	鶴城	晩節の吹寄の色さまざまに 秋の終わり、さまざまな色の葉が吹き寄せられる様を上手に表現。	みづる
37		七五三ひとかたまりの児らに夢	寒立馬
38	しーしー 光雲2	丸窓の茶室に仄か野紺菊 季語が茶室にふさわしい。	倉田詩子
39	修 幹子	まだ続く井戸端会議冬日向 季語が効いている。まだ本格的な寒さではなく、気持ちの良い日に数人でのおしゃべり。笑い声や話し声が聞こえてきます。	木村小麦
40		生きるとは喰ふて寝ることちやんちゃ	染谷風子
41	山菜 かげろう	夕暮の聖樹と変わる街並木 いつもの並木も電気がつくと聖樹に変るという、当たり前の発見でした。イルミネーションが増えることで感じる季節感の表現がよい。	佐藤幹子
42	稀香 寒立馬 霜里 きいち	帰る家ある嬉しさやおでん鍋 寒い夜におでんを作って待っていてくれると思うだけで嬉しいです。おでん鍋を囲む家族が見える。ぬくもる。湯気の上がる食卓が恋しい季節。おでんは我が家ではご馳走、家があり家族がいれば幸せ、幸せが滲み出てくるく句。	西村青夏
43	しんい	木犀やピアニッシモの風の径 今見頃なる京の紅葉。	檜鼻ことは
44	土璃 しーしー	時雨月赤き口紅持て余す 物憂げな雰囲気に季語が効いている。時雨月と口紅の対比が深い。	新井のり子
45	六弦	晩秋や宿なき人と足湯して 秋の一人旅の楽しさが伝わってきますね。	ありぎりす

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十一月

46		妻の墓参りし後や返り花	森佳月
47		迷ひ猫を探す野良猫冬うらら	網野月を
48	高原	低気圧過ぎゆくタベ蕪炊く	航
49	山菜 六弦 京子 風子	どちらかと言へば幸せ小春凪 小春の幸せ感はそのまま句になります。「玉の如き小春日和を授かりし、たかし」を思い出します。多くを望まずこれでいいんだと思います。句全体の軽い雰囲気が季語と合っている。凪いでいるのはひとときだろうが。上五中七の思いを下五の季語にうまく託している。	荒一葉
50	暦文	行く秋の書かねば記憶零れゆ 下五の零れ行くがうまい。	後藤允孝
51	みづる	冷まじや万年床の陰日向 晩秋の心身に迫る荒涼とした感触が伝わってくる。	高原ひろし
52	マスミ	初時雨九谷に淹れる珈琲の香 お気に入りのカップで珈琲を味わう。折から窓の外では、初時雨。季節の移ろいを感じながら。	しーしー
53		野伏せりの隠る場もなき枯野かな	石関六弦
54		霙るるや延命の歯が疼きだす	青木鶴城
55	界子	関取と女将の足袋と干されあり 若島津と高田みづえ思い出して面白い。	河野凡士
56		小夜更けて母はりんごのらせん切り	境界子
57	一葉 きいち かげろう	今朝冬のぱちんと弾く静電気 季節の皮膚感覚が季語で生きた。この時期の困りもの静電気、素敵な句になってよかった。静電気で冬を感じることのあるある感がよい。	本橋稀香
58	修 しーしー	夜もすがら重機よ唸れ雪の街 雪国では雪掻きが大事で中七の措辞が秀逸。雪国の毎夜のありがたさ。	小林土璃
59		夕闇を穂芒阻む川原径	幸子
60		閉店の告知の主や赫とんぼ	光雲2

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十一月

61		幼児の早く熟れよと蜜柑撫で	衛
62		蘆刈の葦原いろにまぎれけり	岡本たか子
63	暦文	諫言は心ににがし神無月 諫言を素直に聴ける人間になりたいものです。	秋谷風舎
64	風子	願はくば恙なき日々毛糸編む 「何もいらない。貴方と一緒にいられるだけで幸せ」羨ましい。	しんい
65	俳爺 山菜 鶴城	新入りは話上手や日向ぼこ 新入りの話に聞き入る爺婆の至福の日向ぼこが窺える。話し下手から見ると羨ましい話し上手。日向ぼこの楽しさですね。場の和みが感じられ、心もぽかぽか。	新暦文
66		柿もぎの体験誘うのぼり旗	和田イチ子
67		小夜時雨子規庵までは今少し	立野音思
68		川沿ひに朝市ならぶ冬日和	俳爺
69	小麦	木枯しや老いて身に付く躱す智慧 年を重ねると躱す術を覚えた、というかどうでもよいことが多くなった。	渋谷きいち
70	たか子 小麦 界子 かげろう	あたたかき立冬四季の崩れかけ 立冬と言っても夏日もあった。今年は夏から冬へと。これも地球温暖化の故か。時宜を捉えた良い作品であります。二季になりそうな昨今の状態が崩れかけという言葉に表されている。温暖化から沸騰化へ地球の嘆きが聞こえてきそう。本当に最近は四季が感じにくい日が増えました。	龍野ひろし
71		スケートを白き太陽沈むまで 初冬の静かな暮らしの中、熱く光る芋粥に一日の感謝が込められているかのよう。箸一善がすべてを物語る。	小林京子
72	みづる 鶴城	霜月や芋粥噴いて箸一膳	霜里
73	暦文	綿虫の中に我あり日本晴 白い綿虫と日本晴れの青空の対比が良い。	森下山菜
74		七五三笑みのこぼるるじじとばば	反町修
75	音思	そぞろ寒ひとりのための朝厨 お一人の暮らしでしょうか。家族のいた頃を思い出して、寂しさを感じている様子の句に思えました。	丸山マスミ

水明インターネット句会（選句・選評）　令和五年十一月

76

小春日や子猫の頭うつらうつら

かげろう

77

允孝

我になほ学びの友あり秋日和

学びが友とは良い友ですね。下五の秋日和が効いていますね。

寒立馬

78

一葉

地に人に赦しのごとく小春の陽

小春の陽を人や地に対する赦しと捉えて斬新。

みづる

79

のり子

凩に向かひ少年竹刀振る

少年の凛とし姿が愛おしい。

染谷風子

80

ことは

冬めく日ミルク多めのコーヒーを

身も心もあたたまりましょう。

木村小麦

81

寒立馬

み社の池の面染めて紅葉散る

17音で示す光景が浮かぶ。

倉田詩子

82

土璃

禰宜の背に秋日さしけり氏神祭

賑わいの中の一抹の寂しさ、観察が鋭い。

佐藤幹子